

採 摭 餘 録（其十二）

久 内 清 孝

K. HISAUTI: Botanical Notes (XII).

○福 壽 草

ふくじゅさうハ餘リニモ普通ノ宿根草本デアル。古クカラ栽培サレテ居ルガ、東京附近ニハ野生ヲ餘リ見受けナイ。從ツテ吾人ノ接スルモノハ多ク栽培品デアル。マタ、野生ランク現在見エルモノモ無イデハナイガ、古ク人家カラ逸出シタモノダト云ハレハ、バ、逸出説ニ證據ガナイト同様、野生説ニモ抗辯ノ理由モナイ。然シ乍ラ現在野生ト思ハルモノハ、假令ソレガ古ク逸出シタモノデアルトシテモ、全ク野生化シテ少クトモ祖先ト同ジ状態ニ復元シテ居ルモノト考ヘラレル。之ヲ東北地方ノ眞正野生品ニ比スルニ、其形状ニ於テ相違ハナイ。之等ヲ綜合シテ見ルト、周邊ノ瓣片ノ外側ハ褐色ヲ帯ビ、莖モ花時ニハ大抵褐色デ、毛茸ハ殆ンド無イト云フ程度ノモノデアアル。然ルニ、横濱ニ古クカラ知ラレテ居ル野生ノ一品ハ、總テガ全ク之レト反對デ且小形デ更ニ花モ小

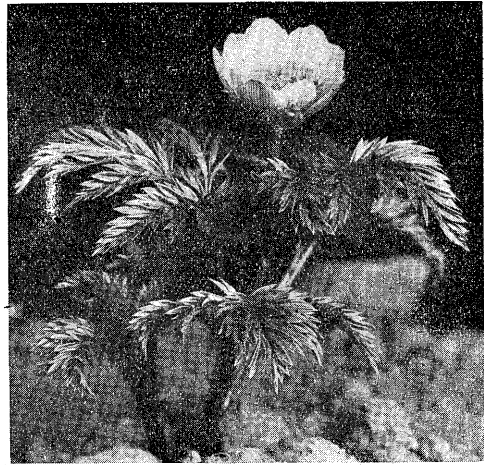


Fig. 1. 横濱・川島産ふくじゅさう（自然大）
（日照時ニハ平開スル）

サク、徑 2 cm 以内デアアル。余ハ大正 5 年以來之ヲ栽培シ、最近ニハ普通品ト同一ノ鉢ニ栽培シテ居ルガ、其差ハ決シテ消失シナイ、其上花期ニ同一條件ノ下デ相當ノ開キガアル。通常普通品ノ花ガ謝シタ後ニ漸ク擡頭シテ來ル。マタ、萼片ノ外片ハ多毛デ、萼ノ著點ニハ長毛ガ密生スル。茲ニ毛ト云フノハ實ハ 2 種ノ毛デ、何レモ單細胞性デアアル。其 2 種ノ毛ハ一ハ長軟毛デ、他ハ前者ヨリモ遙ニ短ク、基部狹窄サレタ特異ノモノデ、此兩者ハ花莖、葉柄ニ於テモ、萼片ノ外側ニ於テモ混生シ、タモ萼片ノ附著部ノモノノミガ長軟毛デアアル。學名

ハ從來使用サレタモノデヨイノデアラウ。即チ本邦ノモノハ、亞細亞大陸東部ノモノト同一種デアラウ、少クトモ毛ノ少イ一形デアアル。而シテ横濱産ノモノハ寧ロ一層原形ニ接近スルモノト考ヘテモ苦情ハアルマイ。サレバ、一品種トシテ區別シテ差支ナイガ、現在ノ日本人ノ思想カラスレバ、ソナナコマカイ事ハ止メルノガ當然デアラウ。以上ハ REGEL ノ *Reisen in den Suden von Ost-Sibirien I* (1861) ノ挿圖ヲ基準トシテ云フノデアアル。

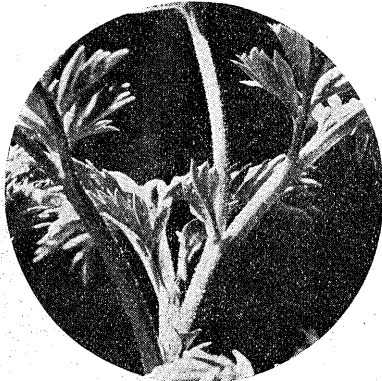


Fig. 2. 莖上ノ毛ヲ示ス

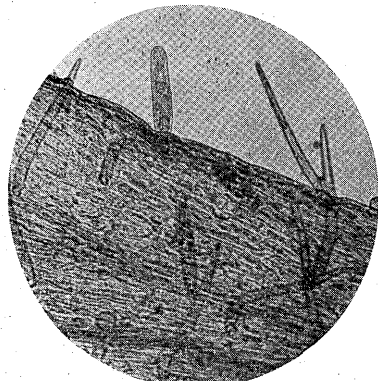


Fig. 3. 莖上ニ生ズル2型ノ毛

次ニ、ふくじゅさうト、ゑだうちふくじゅさうトノ區別デアアルガ、之ハ牧野先生ガ植物學雜誌 XV 卷デ FRANCHET ガ日本ノモノヲ獨立種トシテ考ヘタノヲ、其區別ノ不可能性ヲ指摘サレテ、變種ニ落サレタトキニサレタ事デ、先生モ重ク見ラレテノ事デハ無イノデアツテ、現在デハ先生ハモツト輕ク見ラレテ居ル事情ニ鑑ミ、或條件ノ下ニ於テノミ行ハルベキ考ト見テヨカラウ。ふくじゅさうモ、品種ガ多イラシク、文久年間ニハ 120 餘ニ上ル品種ガ登録サレテ居ル。勿論其區別ハ今日ノ人ノ見方ト一致スルカドウカハ疑問デハ有ルガ、ソレニシテモ相當ナ數ニ上ツテ居タニ相違ナイ。從ツテ微細ナ區別ハドウデモヨカラウト思フ。

○やぶかうじノ分枝

最モ平凡ナ植物デアアルやぶかうじノ莖ガ、枝ヲ生ズルカドウカト云フ問題デアアルガ、コンナ事デモ小倉謙氏ニヨリ之ガ取上ゲラレテ、植物學雜誌 LI 卷 (1937) 4 月號ニ「まんりゅう屬ノ枝ノ離落現象」ナル題下ニ處置サレテ居ル。其 p. 164 ニ、やぶかうじノ分枝ハ寧ロ稀デアアル (原英文) ト述ベラレタ。全ク

仰セノ通りデ莖端ガ止メラレタ場合ハ、必ラズ分枝スルガ、然ラザル場合ニハ殆ソド全ク分枝シナイ、然ルニ小倉教授ノ稀デアルト指摘サレタ事件ガ起ツタ。ソレハ、先年上總鹿野山カラ持歸ツテ鉢植ニシテ日影ニ置イテアツタモノノ莖ノ地上約 4 cm ノ高サノ位置ニ、昨秋若干ノ間隔ヲオイテ 3 個ノ不定芽ラシイモノガ出タ。而シテ其下部ノモノハ立派ナ枝ニ發達シタ。之等ノ芽ハ、何レモ始メヤ、下向シテ居タノデ、或ハ地下ニ穿行スルノデハナイカト思ハレタガ、後何レモ上向シ始メ、今日デハ立派ナ枝トシテ發育ノ途ニアル。シカシ、之モ根莖ニ就テ考ヘラレル當然ナ事デ、地下デハイツモ此手段デ假軸性ノ分枝ヲナシ繁殖シテ居ルノデ、ソレガ今地上部ニ起ツタニ過ギナイ、之ヲ一特異例トシテ記録シテオク。但シ其枝ノ基部ノ内景ハ見テ居ナイガラ、此場合小倉氏ノ見ラレタ様ナ、維管束ノ特異型ガ見ラレルカドウカハ知ル由モナイ。實ハ惜

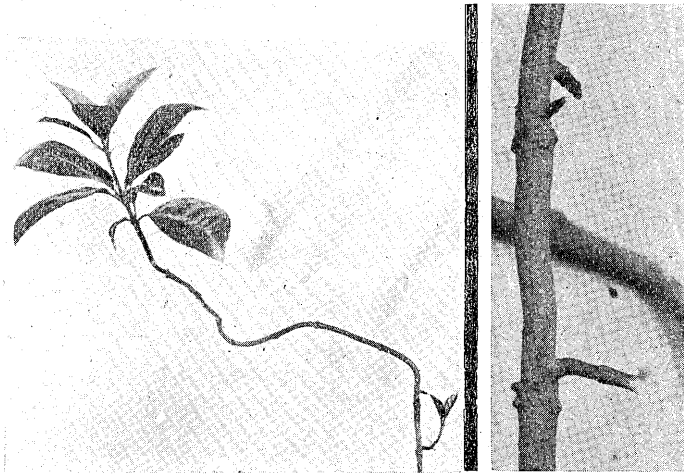


Fig. 4. (左) やぶかうじノ分枝ヲ示ス (右) 初期ニ於ケル其局部的ノ擴大

シクテ切レナイノデアアル、何レマタ分枝シタラ切ツテ見ルノ見デアアル。茲ニ分枝シタト云フノハ、現在デハ正ニ地上莖ノ部分ニ於ケル分枝ト認メ得ラレルケレ共、曾テ地下莖デアツタ部分ガ露出シテ、地上莖トノ區別ガ出來ナクナツタモノカモ知レナイ、ト云フヨリモ、斯様ニ考ヘルコトガ正當デ、寧ロ普通ニハ地上部カラ枝ハ出ナイノデアアラウ。其傍證トシテ、分枝ガ地上ニ近ク起リ、中部以上ニ之ヲ見ザル事ト余ノ栽培品ガ杉林中ニ偃臥シテ居タ斜上性ノ高サ 30 cm 位ノモノデ、現地デハ、其初期ニ於テハ弱キ腐植土質ノ土壤中ニアリシモノガ、其土壤ノ剝脱ニヨリ露出シタ疑モアルカラデアアル。マタ、芽ガ前述セシ如ク始

メ下向キニ出來タ事ハ、更ニ其感ヲ強クサセルモノデアルシ、別ニ余ガ數年來栽培シテ居ルモノハ 30 本位モ並立シテ莖ガ完全ニ直立シテ居ルガ之ニハ斯ノ如キ事ガ全ク起ラナイコトナドカラ推シテ、地上莖ニ分枝ハ起ラナイモノト信ズル。尙斯ノ如キ問題ニ直面シテ、證據固メノ目的デ、澤山ノ標本ヲ檢シテ見タガ何レモ地表カラ、2-3cm 位ノトコロカラ挽ギ取ツタモノガ多ク、完全ニ地下莖ノ分岐ヲ見得ル様ナモノハ多クハナカツタノデ、完全ニ標本ノ必要ヲ痛感サセラレタ。勿論、斯ク申ス筆者自身ノ標本モ其仲間デ、慚愧ニ耐ヘナイ次第デアル。

○田字草ノ葉

田字草ノ葉ガ、文字通り十字形ヲ呈シ、4 個ノ小葉ガ十字形ニ配列シテ居ル様ニ見エルガ、之ハ、明カニ對生セル 2 個ノ羽片ガ、上下ノ關係ヲ有シ、其節間ガ極度ニ短縮シ、其開舒ニ際シ捻換シ、上段ノ 2 羽片 (Fig. 5 a) ガ、下段 (Fig. 5 b) ノモノト反對ノ方向ニ展開シタルモノニ過ギナイ。サレバ、初期ニ於テハ、普通ノ羊齒ト同様ニ、渦狀ヲ呈シ、上下 2 對ノ羽片トシテ延ビ、後ニ至リ十字形ニナル。ソレ故、コノ葉ニ一種ノ輪生葉ノ如キ感ヲ起サシメル様ニ書イテアル文献ニ對シテハ、宜シク、便宜上其様ニ扱ツタモノト解シテ讀ムベキデアラウ。



Fig. 5. でんじさうノ葉ノ開舒スル狀況ヲ示ス